

日本漢語における品詞判別上の諸問題・続貂

張, 愚
中山大学 : 副教授

<https://doi.org/10.15017/4777922>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.423-414, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

日本漢語における品詞判別上の諸問題・統貂

張 愚

1. はじめに

漢語の文法的性質に関しては、すでに優れた研究が幾つも存在する。しかし、その研究の多くは、日本語内部におけるその一般性と整合性の追求を主眼としてきた感があり、個々の漢語の独自性については等閑視されてきた面は否めない（拙稿（2020）参照）。当然、予め用意された理論に基づく一般性と整合性の追求自体は生産性のあるもので有意義であるが、池上禎造（1944）が「有りのままに（漢語の）形を認めるべきであ」る（pp96）と述べるように、実際の使用場面における漢語の姿を虚心坦懐に見ていく姿勢も必要不可欠である。本稿では、このような観点から、日本漢語の文法的性質のうち、主にその品詞性の問題について触れる。なお、日本漢語の定義については、岡島昭浩（2009）などでも言及されたように、

(1) 漢字音より成る単語

（橋本進吉の論に拠る／『日本文学大辞典』を参照）

(2) 日本語の中に用いられる（古代）中国語に起源を持つ語で、主として漢音・呉音で唱えられるもの

（山田孝雄の論に拠る／『国語学辞典』を参照）

といった説明の仕方がある。(1)の「漢字音より成る単語」というのは、字音語で表記されていることを前提にしているため、いわゆる和製漢語も含まれることになる。それに対し、(2)は単に「中国語に起源を持つ」という意味で、和製漢語は含まれない。本稿は、(2)における中国出自の漢語の使用実態に主眼を置くことにする（論述の都合上、和製漢語にも触れるが）。日本語史の中で、こういった中国語出自の漢語がどのような文法的特徴を有するのかについては、すでに拙稿（2020）で論じている。以下で問題にしたいのは、①漢語の品詞性を記述する際、何に注意を払わねばならないのかという点と、②その判別基準をめぐる諸問題である。

2. 語源の同一性について

漢語の品詞分類を行う際に、まず注意しなければならないのは、語の同一性（語源）の問題であろう。ここでその同一性と品詞分類の問題との関係について例を挙げて少し説明してみたい。対象とする語は、筆者が以前調査した漢語「無心」である。現存の漢和辞書と国語辞書を調べたところ、現代語の「無心」の意味用法は以下の二つに大別できる（用例は筆者が作成したもの）。

a. 「何かに夢中になる」という意味

1) 子供が無心に遊んでいる。（形容（動）詞の連用修飾用法 or 副詞用法）

b. 「他人に金銭をねだる」という意味

2) 親にお金を無心する。（サ変動詞の用法）

上のように、1)の「無心」は「何かに夢中になる」という意味で、2)の「無心」は「他人に金銭をねだる」の意として使われている。現存の辞書は、この2種類のタイプを同一の見出し語に収録しているため、1)と2)を同一の語と見なしているように見受けられる。それに従うと、1)の意味の場合の「無心」に具わる文法的な特徴も、2)の意味の場合の「無心」に具わる文法的特徴もすべて一つの語の特徴と見なし、ここでの「無心」は形容（動）詞と動詞の両方に兼属しているということになる。

しかし、筆者が通時的な調査を行った結果、2)の意味の「無心」は和製漢語から派生したもの（和語「心なし」が元の語）で、それに対し、1)の「無心」は中国の漢籍や仏典における漢語「無心」をそのまま借用したものであることが明らかになった。拙稿（2016）にて、両者は同じ訓み、漢字表記でありながら、語源的には別語である可能性が高いと主張した。語源が異なる語と見なせば、「無心」の品詞分類を行う際には、前述の1)と2)を別々に扱い、その上でそれぞれの文法的な特徴に基づいて漢語の品詞性を考えなければならない、ということになる。

このように、共時的な分析と通時的な分析によって調査の結果が異なってくることもありうる。日本と中国における漢語の造語の発想が類似するところもあるため、通時的に見ていく場合、同一の漢字表記があっても、語の同一性を保証することはできない。漢語の品詞分類を行う際には、語源も念頭に入れておく必要がある。

3. 共時的な分析と通時的な捉え方

前節で取り上げた「無心」の例から分かるように、漢語の品詞性を考える時、共時的な分析と通時的な分析による調査結果にはズレが生じることがしばしばある。そのため、研究目的に則して用例を分析する際は、先入観を排除し、両者を混同するようなことは極力避けるべきである。以下、この点についてもう少し考えてみたい。例として取り上げるのは、通時的に見た漢語の連体修飾形3種（「-の」「-なる」「-な」型）の使用状況である。近代から現代にかけての調査は、すでに永澤済（2011b）によって詳細に行われている。拙稿（2020：pp252）でも氏の論考に言及しているが、本節では、それを再度整理し、筆者の立場をより明確にしたい。

永澤済（2011b）は、漢語が日本語に同化を進めた現象として「漢語+接辞」の推移に注目し、堅実な通時的調査を行っている。永澤氏は、近代から現代における漢語のうち93語を調査対象としており、これらの語が「-の」や「-なる」と緩い結合をしていた段階を脱し、形容詞に特化した接辞「-な」を伴う形として、日本語に定着してきたことを述べた。コーパスを利用し、近現代における「漢語+連体修飾形接辞」の勢力分布の推移を詳細に記述したことなど高く評価されよう。

しかし、氏は論文の後半にて、その調査結果を基にさらに論を広げ、「-の」型と「-なる」型が衰退し、「-な」型が大きく伸長した理由を、「原初的な名詞である漢語が形容詞に特化した」（永澤済2011b：pp145-147、同2012：pp98-99を参照）と主張した。これは些か行き過ぎではないかと筆者は考える。前代の漢語を一律無標の名詞あるいは、名詞の性質を有するものと判定して良いかについてなお考慮すべき点はあるが、それはそれとして、通時的な観点からしても、「-な」型が大きく伸長した理由は、必ずしも「漢語の名詞から形容詞への特化」によるものではないと思われる。確かに、連体形「-なる」からル音が脱落して「-な」になっていくという音形変化自体は揺るぎない事実であり、また連体修飾の際に、現代語の「-な」が現れやすいのが形容（動）詞で、「-の」が現れやすいのが名詞であることも否定できない。「未曾有の災害」「無名の人」といった例外もあるが、現代語の場合、基本的には接辞の形態標識が修飾語の文法機能をきちんと反映しているため、「-な」という標識でもって「完全に形容詞になりきったか否か」とする認定方法を取ってもほぼ問題はなく、氏の主張も理解できる。しかし、前述した連体修飾形3種の歴史的推移を有りのままに見ていくと、話はそう単純ではないことに気付かされる。

事実、「-な」が使われていない時代（上代～中世中期）や、三者共存の時代（中世後期～近代以降）でも、「-なる」と「-の」が漢語の形容（動）詞の語尾として機能しにくかったわけではない。たとえば、「-な」型のない時代においては、「-なる」「-の」を語尾とする多くの漢語は、連体修飾の機能や属性的意味を表すことが可能であり〔e.g.「安楽の事」（西・金光明最勝王經 初期点・巻六・八ノ二八～二九）「未曾有なること」（立・妙法蓮華經 經朝点・巻四・五四上七）「非道ナル事」（今昔・一二ノ二八）〕、また三者共存の時代（永澤氏の調査対象とした期間も含む）でも、「むざんのシハざ」（一休はなし・巻3・21オ）「無慙なる殺人の行為」（世界紀聞・太陽・1901年2号）のように、「-の」と「-なる」が形容詞の接辞としての例は少なからず存在する^(註6)。以上のことから分かるのは、「-な」型が現れていない時代にせよ、「-の」「-なる」「-な」3種の接辞が共存していた時代にせよ、形容詞用法あるいは、歴とした形容詞の性質を持つ漢語は間違いなく存在していたということである。そのため、「-な」型が大きく伸長した理由を、必ずしも「漢語の原初的な名詞から形容詞への特化」や「緩い結合をしていた段階からの脱却」（永澤済2011b：pp145-147、同2012：pp98-99）に求める必要はないと考える^(註7)。「-な」型が「なる」から派生し、「-の」「-なる」の代わりに漢語形容詞の接辞として定着してきたことは、漢語の元来の品詞性と区別して考えなければならないであろう。

誤解を避けるために繰り返すが、近代以降における「漢語＋な型接辞」の増加という現象自体は事実であり、否定はしない。また、漢語の語幹を名詞の一種と見なせば、「漢語の用言類のすべては無標の名詞から転成される」という説も整合性の取れた理論になる。それは、言語分析の拠り所を言語主体の意識とする現代語の考察（共時的な分析）ならば、理に合った論考と言えらる。しかし、通時的に漢語の品詞性と接辞の関係を虚心坦懐に見てみると、必ずしもそう単純に説明がつくようなものではなく、なお考慮すべき点が多いように思われる。

4. 品詞判別上の問題点

4.1. 形態的標識の欠如などによる品詞認定の困難さ

漢語の品詞性を通時的に捉える際、和語の研究と決定的に異なる点がある。それは、漢字表記からは個々の語形が直接には現れないケースが多く、単に形態的な特徴からでは、文の成分と品詞を認定しにくい例がしばしば見受けられることである。

無論、元の漢語（中国語）は形態変化（活用）の乏しい孤立型言語（分析的言語とも）なので、膠着型言語である日本語に受け入れられる際に、「愛す」「薨ず」「運動せり」「永久に」「漠然と」「天下泰平なり」「勝算歴々たり」などのように、「す」「せり」あるいは「に」「と」「なり」「たり」などの有標マーカー（活用語尾・接辞の類）が付けられることが多いのも事実である（山田孝雄1940：pp18-22、pp230-241、pp254-261、pp268-274を参照）。しかし、前述したように、通時的に見ると、そうでない例も少なからず存在する。たとえば、平安・鎌倉期の古記録・古文書の場合、中国語に起源をもつ各々の漢語は、助詞・助動詞といった付属語を添えなくても、構文的には、元来の品詞性を保持したまま使用されるケースが散見される。

- 3) 女子児従今日有煩惱事、〈中略〉痢病數十箇度、寸身熱如火、心迷惑
（『小右記』一卷・正暦元年七月）
- 4) 従醍醐路着御奈良者、見物之者迷惑散々嗚呼、
（『後二条師通記』三卷・康和元年二月）

ここに見られる「迷惑」のように、「す」「せり」といった付属語が付かなくても、《登場人物の途方に暮れた心情》を表す中国語元来の動詞用法〔e.g.「且燕國大亂、君臣失計、上下迷惑、」（『史記』「魯仲連鄒陽列傳第二十三」中華書局本に拠る）〕として用いることが可能である。無論、こういった変体漢文の例の背後には日本語文（つまり自立語＋付属語）が存在している可能性も排除できない。しかし、仮にそうであるとしても、それらの漢字表記語の訓みと違い、多くの品詞や活用形といった文法的特徴については、なお一通りに推定できないのも現状である。^(注9)

以上のことは、後の和漢混淆文資料においても同様のことが言える。これらの資料は、形態的な特徴の観察が比較的容易とされるが、漢語の品詞性を正確に捉えることが難しい場合もある。次の例文を見てよう。

- 5) 三井寺の鎮守新羅明神は、娑竭羅龍王の子也。智證大師渡唐の時、大師の佛法をまもらんと誓給て、形をあらはして、彼寺にあとをたれ給へるなり。
（『古今著聞集』「神祇第一」日本古典文学大系に拠る）
- 6) 〈前略〉渡唐ノ時モ或ハ五筆ノ藝ヲホドコシ、サマヾノ神アリシカバ、唐ノ主、順宗皇帝コトニ仰信ジ給キ。

上記の「渡唐の時」^(註10)は、文字通り「唐に渡る時／渡っている時」の意味として理解すれば、松下大三郎氏の言う「無活用動詞」のジャンルに入れることができる。一方、それを前後の文脈に従って「在唐（唐にいる）」の意味合いで捉えれば、現代語で言う「在宅の時」と同様に、名詞か、動きのない状態動詞かを判定しにくいものとなる。

以上のように、形態的標識の欠如に加え、形態的な特徴と文法機能（統語的機能）のズレも、日本語史における漢語の品詞性を捉えにくくする要因と考えられる。印欧語の場合、形態的な特徴に基づいて品詞分類できるのは、形態が文法機能をうまく反映しているからにほかならない。たとえば、英語では接尾辞 -s を用いると、名詞の複数を表すことになる。また、-ing、-ness を付けることで、動詞と形容詞を名詞化することができる。形態が文法機能を反映しているため、形態的な特徴のみで品詞転成の有無を判別することが可能であるが、日本漢語の場合は、前述した諸例文を見て分かるように、印欧語よりも形態と機能のズレが多く、品詞の認定は容易ではないという印象を受ける。^(註11)それゆえ、漢語の文法的特性の精密な記述は極めて困難と言えよう。

4.2. 分類の基準として意味を導入すべきか

漢語の意味変化を追究するには、必ず原語の意味に遡らなければならない。本来であれば、漢語の日本語化の一環として品詞の使用状況を捉える際にも、原語の使われ方と比較しながら見ていく必要がある。しかし、両言語における構造上の相違が障壁となり、その作業を困難にしてしまう。

漢語の品詞性をより連続的に捉えようとするとき、もう一つ注意しなければならない問題がある。それは、語の〈意味〉の位置付けである。

漢語の意味の変化とその文法的な特徴（形態・統語レベル）の変化との間に必然のつながりが存在することは、これまでの研究によってすでに証明されているが（小野正弘（2001）、拙稿（2014）などを参照）、では、逆の言い方、つまり漢語の品詞性を判別する際に、意味を参考基準にすべきかどうかについては、研究者の間で必ずしもコンセンサスが成立しているとはいえない。筆者としては、厳密な意味での品詞分類の手順において、語の意味が顔を出す余地があるかどうかについて確かに考慮すべき点があるだろうが、少なくとも、漢語の受容前後の品詞性（具体的には、連体修飾語の位置に立つ名詞と形容詞との区別

および、述語の位置に立つ動詞と形容詞との区別)を判別する上では、意味も形態・統語的な特徴と同様に、重要な参考基準になり得ると考えている。たとえば、述語の位置に立つ漢語は動詞なのか、形容(動)詞なのかを判別するとき、その形態と統語的位置だけを見ても自ずと限界がある。漢語の動詞も形容(動)詞も単独で述語になる力(いわゆる陳述の能力)をもっているため、活用語尾などの形態的な特徴が直接的には観察できない文献資料に現われる場合、意味を参考基準にしなければその品詞性の判別に戸惑うはずである。

ただし、その際に注意すべきなのは、漢語の文法的な諸特徴(形態、統語)と意味の関係を決して取り違えてはいけないということである。これを説明するにあたって、次に挙げる平安初期の點本・山田本『妙法蓮華經方便品第二』(白點〔京都大学所蔵複製本参照〕)^(注12)の2例を見てみたい。

- 7) 无智ノ者ハ錯^(るい)ち亂^(るい)コトアリ、迷惑スルコトヲシテ不^(ず)ナリナまし受^レ教ヲ。
(山・妙法蓮華經方便品第二・六ノ三〇)
- 8) 當來ノ世ノ惡人ノ^(ハ)聞^(き)テ仏ノ說^(き)タマヘルヲ一乘ト、迷惑シテ不^(ず)シテ信受^レセ、
破^(り)レテ法ヲ墮^(つべく)アラムヒト(ト)惡道^(ニ)ニ、
(同・一〇ノ四)

上の2例に付されている「迷惑スルコトヲシテ」「迷惑シテ」の訓注を見れば分かるように、日本語では古くからこれらの「迷惑」を動詞の述語用法として使用している。しかし、訓読元の漢訳仏典『妙法蓮華經』(卷第二・方便善巧品)に就けば、ここの対応箇所「無智者錯亂 迷惑不受教」「當來世惡人聞佛說一乘 迷惑不信受」の「迷惑」は、動詞用法としてではなく、「錯亂、迷妄、判断力の喪失」の意を表す形容詞用法として捉えるのが普通である。同じ語であっても、中国語では形容詞用法をもつのに日本語ではサ変動詞になるという傾向とその要因については、すでにこれまでの研究で指摘されている(中川正之(2002)、拙稿(2012)などを参照)。ただし、それは決して同一の判別基準に基づく考察の結果ではないことに注意を払わなければならない。前述の「迷惑」の例を見て分かるように、漢訳仏典における「迷惑」を形容詞用法としたのは、その語の意味に基づく分析であるが、日本の訓点資料におけるそれをサ変動詞として見た場合、その分析結果は、当該語の形態的な特徴に基づくものである。

従って、前述のパターンは、「我慢>我慢す」「成敗>成敗す」といった受容後の典型的な品詞転成のパターン^(注13)とは異なるタイプのものと言わざるを得ない。

現代漢語の研究ならともかくとして、歴史的な観点から漢語の品詞性を考えるとき、こういった異なる判別基準が混在しているタイプのもは、品詞転成の用例から除外するのが妥当であろう。

以上、通時的に漢語の品詞性を捉える際に、出会う可能性の高い幾つかの問題を取り上げてみた。とくに漢語の動詞と形容（動）詞の境界の問題に関しては、日中両国における意味・形態および統語的な振る舞いが完全に一致しない点に難しさがあるため、まずレベル（形態と形態、統語と統語、意味と意味）を分けて分析した上で、全体を統合するのが妥当な記述の手順ではないかと思われる。

5. おわりに

以上のように、通時的に漢語の品詞性を「有りのままに」見ていくと、必ずしもシンメトリカルな体系をなしていないことに気付くはずであり、また日本語史の中の漢語の品詞性を判別しようとした場合、様々な注意すべき点があると考えられる。文の成分や品詞性といった文法的性質は、汎時的に分析される傾向があるが、調査の対象と目的によっては同じ結果が得られるとは限らない。漢語の品詞性は、その性質と研究目的に則して捉えるべきというのが、本稿における最も重要な主張である。では、そのためには具体的にどうすれば良いのか。その答えが未だ簡単に得られる状況になっているとは言えないが、分析の視点と方法に関する提案は今後も広く行われる方が良いであろう。現在に目を向けて言えば、たとえどんなに小さな歩幅であっても、前に向かって一歩踏み出すことには大きな意義がある。当然、いかなる初期の試みも完璧はありえないという意味において、本稿で示した提案は文字通りの試論である。しかし、逆に捉えれば、それらの試論にも、飛躍的な発展への契機が大いに潜んでいるようにも思う。

(注1) 山田孝雄 (1940) に対するご指摘ではあるが、現在も有効である。

(注2) 詳しくは参考文献にある拙稿 (2016) を参照していただきたい。

(注3) 本論文は、2012年度の漢検漢字文化研究奨励賞 (佳作) を受賞し、『漢検漢字文化研究奨励賞受賞論文集』2012年版にも所収されている。

(注4) 初期の漢語の品詞性については拙稿 (2020) で筆者の考えを示した。その基本的な考え方は現在も変わっていないが、本稿では紙幅の関係で特に触れない。

(注5) ここで言う「歴史的な推移」は、永澤氏の調査対象とした1917-1925年を含め、より長い期間を指している。なお、近代における「-の」「-なる」「-たる」といった形容詞接辞の存在は、永澤氏 (2011b : pp135-136) でも言及されている。

- (注6) 拙稿(2020: pp252)の注2)を参照。
- (注7) 永澤氏と似通った観点は、鈴木泰(1983: pp379)、須永哲矢(2017: pp79-106)なども挙げられる。鈴木泰(1983: pp379)が「(初期の)形容動詞とされる漢語には属性的意味」を持たないものが多いと述べたのも、まさに漢語の名詞性を念頭に置いた主張と言えよう。
- (注8) 詳しくは峰岸明(1986)、同(1994)、田中草大(2014)を参照されたい。
- (注9) 平安・鎌倉時代の文書記録類における漢字表記語の訓みについては、音読か、訓読か、もし音読である場合、それは呉音系の字音に従うものか、漢音系の字音によるものかは、峰岸明氏の提唱した定訓作業によって解明しうるものが多い。しかし、それらの語の活用形や品詞性などの判別については、一筋縄ではいかないことが多々ある。たとえば、田中草大(2014: pp23)では、品詞と活用形が定められないケースとして、それぞれ「尊重之処…「尊重の処」か「尊重する(せる?)処」か?」「入夜馳参、候雲上…終止形か連用形か?」のような例が挙げられている。
- (注10) 『園城寺伝記』では、用例5)の鎮守新羅明神が出現したのは、智証大師円珍が「渡唐の時」ではなく、「唐から帰国する際」であると記されている。
- (注11) 無論、和語でも漢語ほどではないが、形態と機能が一致しない例が存在する。たとえば、現代語の「歩いて帰る」の「歩く」のように、動詞の中止形でありながら、「帰る」という動作の状態を表し、構文的には副詞的用法として用いられている。
- (注12) なお、文中の訓点を解説する際には、大坪併治(1956)「山田本妙法蓮華経方便品第二試読」(『訓点語と訓点資料』7)も参照させていただいた。
- (注13) これらの例は、語形の変化に伴って、語義も変化している。

【参考文献】

- 浅野敏彦(2014)「漢語」『日本語大事典』上〔佐藤武義・前田富祺編集〕(朝倉書店)
- 池上禎造(1944)「漢語の品詞性」『国語国文』23-11
- 岡島昭浩(2009)「漢語から見た語彙史」『シリーズ日本語史 語彙史2』(岩波書店)
- 小野正弘(2001)「意味変化の形態的指標となるもの」『国語語彙史の研究』20
- 加藤重広(2015)「形容動詞から見る品詞体系」『日本語文法』15-2
- 佐藤武義(1963)「中古の物語における漢語サ変動詞」『国語学研究』3
- 鈴木泰(1983)「漢語ナリ活用形容動詞の史的 성격について」『副用語の研究』(明治書院)
- 須永哲矢(2017)「文法形態からみた漢語」『日本語ライブラリー 漢語』(朝倉書店)
- 田中草大(2014)「「欲」の訓法 追考——変体漢文解読のために——」『日本語学論集』10
- 中川正之(2002)「中国語の形容詞が日本語でサ変動詞になる要因」『日本語学と言語学』(明治書院)
- (2005)『漢語からみえる世界と世間』(岩波書店)
- 永澤済(2011a)「文法的機能からみた漢語」『国文学 解釈と鑑賞』76-1
- (2011b)「漢語「-な」型形容詞の伸長——日本語への同化」『東京大学言語学論集』31
(日本漢字能力検定協会編『漢検漢字文化研究奨励賞受賞論文集』2012年版所収)
- 野村雅昭(1998)「現代漢語の品詞性」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』(汲古書院)
- 濱田敦(1963)「漢語」『国語国文』32-7

- 前田富祺 (1983a) 「漢語副詞の種々相」『副用語の研究』(明治書院)
 — (1983b) 「漢語副詞の変遷」『国語語彙史の研究』4
 峰岸明 (1986a) 『平安時代古記録の國語學的研究』(東京大学出版会)
 — (1986b) 『変体漢文』〔国語学叢書11〕(東京堂出版)
 — (1994) 「『吾妻鏡』の言語に関する諸問題」佐藤喜代治〔編〕『国語論究5 中世語の研究』(明治書院)
 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』(ひつじ書房)
 森岡健二 (1994) 『日本文法体系論』(明治書院)
 山田孝雄 (1940) 『国語の中に於ける漢語の研究』(寶文館)
 呂叔湘 (1954) 「关于汉语词类的一些原则性问题」『中国語文』9 (使用テキスト: 呂叔湘著『呂叔湘全集』第2卷〔汉语语法论文集〕遼寧教育出版社、2002年版)
 — (1979) 『汉语语法分析问题』(商务印书馆)
 王冬梅 (2018) 『汉语词类问题』(学林出版社)
 王力 (1989) 『漢語語法史』(商务印书馆)
 朱德熙 (1982) 『语法讲义』(商务印书馆)
 — (1985) 『语法问答』(商务印书馆)
 張愚 (2012) 「本邦文献に見られる漢語「迷惑」の受容——上代から中世前期までの用例を中心に——」『文献探究』50
 — (2014) 「「むざん」の語義変化——形容詞の統語的機能との関わりから——」『日本語の研究』10-1 (『国語学』通巻265号)
 — (2016) 「漢語「無心」の史的展開——複数の語源をもつ事例として」『訓点語と訓点資料』136
 — (2019) 「山田孝雄の漢語品詞論——『国語の中に於ける漢語の研究』から——」『語文研究』128
 — (2020) 「漢語は本当に名詞として受容されたのか——日本語史における漢語の品詞性をめぐる諸問題」『日本研究』34 (Korea Citation Index 収録)

[付記] 本稿は広東省哲学社会科学规划2019年度一般項目(課題番号: GD19CYY19)「语法互动视域下汉语词义在古日语中的传承及演变研究」(研究代表者: 張愚)および中山大学2020年度青年教师培育項目(課題番号: 20wkpy80)「接触语言学视阈下中日同源汉字词的词性对比研究」(研究代表者: 張愚)による成果の一部です。

(ちょう ぐ・中山大学副教授)